ただの先輩後輩じゃなく

とらきちじろう

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

エアグルーヴとメジロドーベル、先輩後輩の２人がイチャイチャしたりバチバチしたりするだけ。

少しでも２人の魅力を広めたい。ｐｉｘｉｖにあげてるものを大体そのまま持ってくる予定です。

目　次

大阪杯のあとに・その背中を越える日まで ―――― 1
アタシもいつか、ヒロインに ―――― 5

大阪杯のあとに・その背中を越える日まで

大阪杯が終わった。結果は、エアグルーヴ先輩が1着、アタシが3／4バ身差で2着。

宿舎に戻って1人、今日のレースを思い返す。

最終コーナーまで、先輩のすぐ後ろについて、直線で横に並んだ時、もしかしたら勝てるかもしれないと、思った。でも、全力で走っても背中は遠くなって、届かなくて。その光景が、悔しさが、レースが終わってからもずっと離れない。

悔しい、悔しい。自然と目には涙が溜まっていて、気を抜くと大声を上げてしまいそうだった。……本当は、今のアタシじゃ勝てないって、走る前から分かってたのに。

「だって……先輩は……」

どんな時だって、エアグルーヴ先輩は輝いている。

アタシが男性教官とのトレーニングで上手くいかなくて、悩んでいたところに声をかけてもらったのが、始まり。そして、先輩は自信がなかったアタシに理想を示してくれた。あの日から、アタシはずっと先輩の背中を追っている。いつか追い越せる日を夢見て、努力を重ねてきた。

けれど、同じレースで走るようになって、力の差を見せつけられた。敵わないって何度も思い知らされた。

でも、アタシが諦めたいって思った時、手を伸ばしてくれたのも、見捨てないでくれたのも先輩だった。レースの世界では、アタシたちは敵同士なのに。前と変わらずトレーニングを一緒にしてくれて、いつも気にかけてくれて、ずっと背中を追わせてくれる、アタシの理想。

負けるのは悔しいけど、先輩が1着になることは嬉しい自分もいて。でも、やっぱりとてつもなく悔しくて。貴方を追い越したい気持ちは、どんどん強くなっていく。

「次は、絶対……！負けない……っ！」

小さく叫んだ。

――先輩が「私を追いかけてみろ」と理想を示してくれた日のことを、今でも覚えている。先輩は、自分の理想をこんな風に語っていた。
道を見失いそうになった時。
膝をつきかけた時。
かの理想が、私を導く。
『ここまで来い』って」
何度も思い出して、繰り返した独り言。そして、脳裏に焼き付いた背中を、また追いかける。
「努力するだけ。あの人よりも」
目を閉じて想像するのは、追い越した先に見える景色。

大阪杯が終わって、2人での定期トレーニングの日。いつも通り、先輩の後ろについてコースを周回する。今日は、これまで以上にフォームを観察し、息遣いに耳を澄ませて――勝つ方法を考えていた。
数日経っても悔しさは消えない。あの光景を思い出すと涙が溢れそうになる。でもそれ以上に、胸から熱いものが湧き上がるのを感じている。
ふと先輩が、尻尾を大きく揺らして振り向いた。休憩の合図だ。
「レースからそこまで日は空いていないが……疲れは取れているようだな。いいペースで付いてきた」
「あ、ありがとうございます……!」
いつもと同じ距離だが、集中していたからかあっという間だった。もっと走りたい。この後のトレーニングはどうしよう。先輩に勝つには、もっともっと努力しないと――
「ドーベル？何か険しい顔をしているが……大丈夫か？」
「……!?は、はい！大丈夫です」
考え事をしていたせいで、返事の声が上ずってしまう。先輩は私の顔を覗き込んで、僅かに口角を上げた。
「この間のレースで自信を失っている、という訳ではなさそうだな。むしろその逆か」

「え……逆、って？」
「気付いていないのか？確かに感じるぞ。お前の闘争心を、絶対に負けないという強い意志をな」
「……！ご、ごめんなさい！アタシ、そんなに顔に出てましたか!?」
　思わず頬に手を当てる。自分の心の内が見透かされていて、顔が一瞬で熱くなった。先輩はそんな私の様子を見て嬉しそうに笑う。
「なに、謝る必要はない。嬉しいことだ。お前が私を超えたいと思っていること、そして、その思いが隠しきれないほど大きいことはな」
「～～～～っ!!違っ、そんなつもりは……！な、なくはないですけど、えっと……」
　なぜだか、先輩にはこの気持ちを知られたくなかった。先輩が理想で、超えたいと伝えてはいたけれど、そんな言われ方をするとなんだか自分が重いみたいだ。
「まあ、やる気があるのは良い事だ。だが、次のレースもまだ決まっていないんだ。あまり気合を入れすぎて、途中で燃え尽きないようにな」
「……ありがとうございます。でも先輩、心配しないでください。先輩への熱が収まることは絶対ないですから。先輩と出逢ってからずっと、憧れも、好きって気持ちも、超えたい思いもずっと消えなくて。きっと、燃え尽きるどころかもっともっと熱くなって……」
　言いながら、先輩が気まずそうに目を逸らし、頬を赤らめたのを見て、気が付いた。もしかしてアタシ、とんでもなく恥ずかしいことを口にしてた!?!?
「あっ……先輩！その、今のは例えというか、えっと、先輩のこと大好きなのはもちろん嘘じゃないんですけど、そういう意味じゃないというか……!!!」
　……どんどん墓穴を掘っている気がする。
　先輩は顔を真っ赤にして、耳はへなへなと下に垂れていた。そんな様子を見たことがなかったから、なんだか可愛いと思ってしまったけれど、だからと言ってこんな雰囲気が続くのは耐えられない。
「へ、変な空気にしちゃって、ごめんなさい！トレーニングに、戻りま

しょう！」
「……そうだな」
後ろを向いて、すっかり熱くなった顔を仰ぐ。４月の風はまだ涼しく、火照りを冷ますのにちょうど良かった。
「……ドーベル」
「……！なんですか？」
「振り向かなくていい。その……私だけ言われてばかりでは嫌だからな」
やけに固い先輩の声。言葉通り、背中を向けたまま聞いていた。
「私にとっても、お前は大切な存在だ。お前の私への思いと同じくらい、私もお前を意識している。だから……そのまま上がってこい。そして、必ず私を追い越してみせろ」
余りにも、不意打ちすぎる。
「……以上だ。次のトレーニングに行くぞ」
急いで振り向いて、走り出した背中を追う。早くなる心臓の鼓動。
ほら、やっぱり。この熱は冷めることを知らない。

アタシもいつか、ヒロインに

エアグルーヴ先輩とのトレーニングの日。今日は空き教室で勉強をして、賢さを上げるのがメインだ。

隣同士の席に座り、別々の本を読む。時々先輩に質問して、休憩がてら他愛無い話をして。一人で勉強するよりずっと、アタシはこの時間が好きだ。何より、先輩と2人でいられる時間だから、好きなのかもしれない。

トレーニング開始から1時間ほど経った頃。突然、教室の後ろのドアが開き、1人のウマ娘が飛び込んできた。かなり急いで来たのか、息を切らしている様子だ。

「エアグルーヴ先輩！トレーニング中すみません……！少しいいでしょうか？」

「ん……？どうした。今行く」

あの娘は……確か生徒会に所属しているウマ娘だ。先輩は呼びかけに頷き席を立つと、アタシに振り向いて、申し訳なさそうに頭を下げた。「気にしないでください」と、首を左右に振って答える。

ドアが閉められ、すりガラスからは2人の影だけが透けていた。誰かに頼られている先輩を見るのは好きだけど、ちょっとだけ、モヤモヤする。

気持ちを誤魔化すように本に目を落としてはいても、意識はほとんど耳に向いていた。廊下で話す声ははっきりと聞こえないが、声色を聞く限りあまり楽しい内容ではなさそうだ。

話が終わり、再びドアが開く。眉間に皺を寄せて、頭を抱えた先輩の姿。嫌な予感がした。

「ドーベル、すまない。少し急いで確認しなければならない用ができた。すぐに戻るが、その間自習をしてもらってもいいだろうか？」

「……はい、分かりました！」

廊下を歩く2人の足音が遠くなって、消えた。静かになった教室では、時計の針の音さえもやけに大きく聞こえてくる。先輩に言われたように、1人でもちゃんと勉強しようと本を開いてはいるけれど、内

容はちっとも頭に入らなかった。
「ふわぁ……」
窓から差し込む日の光が、自然と眠気を誘う。何度か欠伸を噛み殺したが、次第に首が前に倒れていく。ダメだと言い聞かせるように、首を横に振って、この睡魔に抗おうとしたけど……アタシは気付かないうちに、眠りに落ちていた。
◇
とても幸せな夢を見ている。簡単に言えば、エアグルーヴ先輩にもの凄く褒められる夢だ。夢なのに意識はやけにはっきりしていて、腕の下にある机の感覚もまだ感じられた。
優しくて、大好きな先輩の声がすぐそばで聞こえる。
「髪が綺麗だ」とか、「笑顔が可愛い」とか……「ずっと一緒にいたい」とか。普段だったら恥ずかしくて聞いていられないような言葉も、夢の中のアタシはフワフワした気持ちで聞いていた。
段々と、意識が深いところに落ちて、声が遠ざかる。胸の中は幸せな気持ちに包まれていた。
◇
固い机の感触。頭の下に敷いた腕が痺れている。目を開けると、開いたままの本と、その向こうにうっすらと先輩の姿。
アタシ、寝ちゃってた……!?一気に心臓が早鐘を打つ。飛び起きて、謝罪の言葉が一番に飛び出た。
「せんぱいっ！ごめんなさ――」
隣の席の先輩を見て、その言葉は途切れる。先輩は、机の上で穏やかな寝息を立てていた。
「寝て、る……？」
安心して、肩の力が無意識に抜けてしまった。けど、安心してる場合じゃない。先に寝落ちてしまったのはアタシの方だ。申し訳なさを感じつつ、先輩の顔を覗き込む。本当はすぐにでも起こして、トレーニングを再開しなきゃなんだけど……。
「……寝顔も、綺麗だな。先輩」
アタシは、その姿に見惚れてしまっていた。

眠っていても変わらない凛とした顔つき。顔にかかる髪は滑らかで、耳の毛並みも美しい。白く透明な肌も、そこに映える真っ赤なアイシャドウも。

――本当に、綺麗だ。自分の醜さが嫌になってしまうくらいに。

綺麗なのは容姿だけじゃない。いつでも気高く、誰より努力する心の在り方。多くの人に信頼されて、レースでも結果を残す、その貫禄。エアグルーヴ先輩の素敵なところなんて数えたらキリがない。

それに比べて、アタシは顔も性格も、嫌いなところばかりだ。

……特に、最近のアタシは、何かヘンだ。

先輩と他の誰かが一緒にいると、誇らしいのに、なぜか目を逸らしたくなって……嫌な気持ちが、心の奥に溜まっていく。アタシに見せない表情を見せる他の娘に、友人にまで嫉妬してしまう。

スズカと走っている時の先輩は、どんな時より真剣で。

タイキと話す先輩は、呆れながらも、いつもより楽しそうで。

ルドルフ会長といる時の先輩は、尊敬と敬愛の思いで溢れていて。

そんな子供じみた嫉妬は、結局、自己嫌悪の裏返しだということも分かっている。

――スズカみたいな圧倒的な速さがあったら、先輩のライバルになれるのに。

――タイキみたいな明るさがあったら、もっとたくさん先輩と話せるのに。

――会長みたいな威厳と実力があったら、先輩の心を、アタシに向けられるのに。

本当に、自分が嫌になる。こんなことを考えてしまうところも、変われないところも。

ふと、さっき見ていた夢を思い出して、呆れて笑ってしまった。夢の中の自分の方が、よっぽど素直だ。本当は先輩にたくさん褒めてもらいたいし、先輩の大事な存在になりたいと思ってるのに。実際のアタシは……そんなこと言える訳なくて。

この気持ちの正体、分かってるんだ。少女漫画のヒロインと同じ。その人のことを考えるとドキドキして、他の誰かと一緒にいると苦し

くて……独り占めしたくなる。この気持ちの名前は。
「アタシ、やっぱり先輩のことが好――」
抑えきれない思いが口から溢れたちょうどその時、先輩の耳がビクッと動いて、目蓋がゆっくりと開いた。深く蒼い瞳が、私を捉える。
「え……!せんぱ、い……いつから、起きて……」
「ん……っ!すまない、ドーベル……!!私としたことが、居眠りをしてしまうなどとんだ失態を……!」
勢いよく起きた先輩の謝罪が、驚きと恥ずかしさで固まっていたアタシの言葉を遮った。
「……ドーベル、どうした?顔が赤いぞ」
「いや、な、なんでもありません!」
びっくりしすぎて、心臓が飛び出そうだ。アタシの、さっきの……告白、聞こえてないよね……?
「む……もしかして、私は寝ている間に何か変なことを口走っていたか……!?」
「……え?ふふっ。それは全然、大丈夫です!」
まだ少し眠そうな先輩の声。そして、心配事が余りにも普段の雰囲気とかけ離れていたから、思わず笑ってしまった。
「しかし、本当に面目ない。先に起きていたのなら起こしてくれて良かったのだが」
「も、元はと言えばアタシが先に寝ちゃってたので、先輩が気にする必要ないです!……先輩こそ、戻ってきた時にどうして起こさなかったんですか?」
「いや、その……」
先輩は急に歯切れ悪く、目を逸らす。
「お前の寝顔が……とても可愛らしかったから、しばらく眺めていたのだ。それに、ずいぶん気持ちよさそうに寝ているから、つられて眠くなってしまったというか……」
「……!!」
予想外の返答に頭がパンクしそうだ。先輩がアタシの寝顔を見てたこととか、つられて寝てしまったこととか。恥ずかしいし、信じら

れないし、可愛いし。
「いや、言い訳をするのは良くないな。私の意識が足りなかった。すまない」
「こ、こちらこそ、ごめんなさい。せっかくのトレーニングの時間を無駄にしちゃって。……あ、あと！」
「ん、どうした？」
「その……先輩。起きる前にアタシが言ってたこと、聞こえてないですよね……？」
　一番の不安を問いかけると、先輩は不敵な笑みを浮かべた。
「どうした？何か私に面と向かって話せないことでも呟いていたのか？」
「……え!?ああっ、えっと、違っ……！き、気にしないでください!!」
　完全に聞かない方が良かった。寝起きの頭で、色んなことが起こりすぎて、正常な思考ができなくなっている。首をブンブンと振るが、先輩の強気な表情は崩れない。
「ふっ、冗談だ。詳しいことは聞かないでやろう」
　そう言うと、先輩は立ち上がり、私の頭を軽く撫でる。温かく優しい手。嬉しくて自然と笑みが溢れてしまう。
「だが、そういう風に聞くということは」
　ふと、手の動きが止まる。見上げた表情はどこか不安げだった。
「私が、その……お前が寝ている間に呟いていたことも……聞こえていないだろうな？」
「……え？」
「いや、聞いていないならそれでいい。……気分転換に、食堂に甘いものでも食べに行くか？」
「……はい！あ、でも……」
「む。ドーベルはトレーナーに甘いものを控えるよう言われているのだったか」
　マックイーンと同じく甘い物に目がないアタシは、食べすぎないようにトレーナーに厳しく言われている。でも、最近は頑張って我慢してるし、せっかくのお誘いなのだから、食べたいというのが本音だ。

「アタシは、食べたいです！その……トレーナーには怒られるかもしれないですけど……」
「勉強というのは思っている以上に体力を使うものだ。それほど心配する必要はない。もし何か言われたら、私も一緒に謝ろう」
「えっ！そ、それはさすがに、申し訳ないというか……」
「ふむ、そうか。それなら……2人で半分ずつ食べるというのはどうだ？」
「あ……！それ、いいと思います！」
教室を出て、先輩の少し後ろをついていく。後ろ姿を眺めながら、さっき先輩が言っていたことを思い出していた。アタシが寝てる時、先輩……何か言ってたのかな。
寝ている間に何かあったかといえば……そう、夢を見てたんだ。それは、先輩に褒められる、とても素敵で、鮮明な夢で――。
「……え」
もし、もしあの夢がアタシの妄想じゃなくて、先輩が、本当に言っていたことだったら。綺麗とか、可愛いとか……一緒にいたいとか、本当に先輩が思ってくれていたら。
「ど、どうしよう……」
自分でも聞こえないくらい小さな声で呟いた。
鼓動と呼吸が速くなる。顔が熱い。
もちろん、現実だ、なんて本気で信じてはいないけど、恋する乙女が勘違いして、希望を持つには十分だった。
アタシは他の娘みたいにはなれない。けど、やっぱりアタシなりに、まだこの恋を諦めたくない。
あの幸せな夢が、夢じゃありませんようにと願った。いつか大好きな先輩の手を握れる日を、少女漫画のヒロインのように夢見ている。